
懐かしき夏の思い出

HERON

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

懐かしき夏の思い出

【Nコード】

N4495D

【作者名】

HERON

【あらすじ】

彼は夢を見ていた。ずっと昔の出来事。甘酸っぱい初恋の夢。

彼は夢を見ていた。ずっと昔の出来事。甘酸っぱい初恋の夢。

田舎にある一軒家。周りには畑も見える。そこに彼はいた。このとき中学二年生である。彼が家の中で少しの間ボォーッとしていると、家の外から大きな声で「大輔だいすけ！」という声が聞こえてきた。

当然。大輔というのは彼のこと。大輔は急いで家のドアを開けた。

「よっす大輔。遊ば！」

大輔がドアを開けたそこにいたのは女性である。何を隠そう、この彼女こそが大輔の初恋の相手なのだ。

「おお。それはいいけど、お前……」

大輔は何やら気まずそうな感じでそう言った。

「うん……大輔ももう知ってるよね。私が明日引越しちゃうこと……」

二人に少し沈黙が流れた。このままではまずいと思った大輔は、焦りながら「変なこと聞いてごめんな。とりあえずあがれよ」と言っ

た。
大輔の部屋で遊んでいた二人は大輔の母親から「大輔！ 奈々実ななみちゃん！ スイカ切ったから食べにいらっしやい」と言われた。なので二人は階段を下りた。

スイカを食べていると、奈々実が急に大輔のほうへ振り向き「スイカおいしいね！」と満面の笑みを見せた。大輔は奈々実のそんな姿にドキツとしながらも「ああ。そうだな」と頑張つてクールに言葉を返した。

そして時間は流れ夜。星がキラキラと輝いている。その星空の下で大輔の家族と奈々実の家族で花火をしていた。

大人は大人同士で明日の別れに対するシリアスな会話を。大輔と奈々実は二人で花火を楽しんでいた。

楽しい花火もいよいよ大詰め。最後は家族全員で線香花火大会をすることとなった。ルールは簡単。一番最後まで線香花火が消えなかった人の優勝である。

一人また一人と線香花火が消えていく。そして、残ったのは大輔の線香花火であった。奈々実も「大輔の線香花火すごい！」と感激の眼差しで大輔と線香花火を見ている。

大輔はずっと心で線香花火よ消えるなと叫んでいた。消えると夜が終わる。夏が終わる。今日が終わる。楽しい日々が終わる。だから消えるな。ずっと奈々実と一緒にいれるこの瞬間が幸せなんだ。線香花火よ消えないでくれ。お前が消えたら明日になっちまう。

ずっと、そんなことを心で叫んでいた。だが、線香花火はずっとパチパチ鳴っていきやめない。線香花火は静かに消えた。それと同時に奈々実といれる今日も終わった。

大輔は家に帰った後、色々しているうちに寝る時間となり布団に入った。

大輔は寝れなかった。そして頭の中でずっと考えていた。このまま終わっていいのかと。

朝日が昇る時間までずっと自問自答を繰り返していた。そして大輔は一つの結論を出したのだ。

奈々実の家族がお別れの挨拶に来た。当然。奈々実も一緒である。奈々実はいつものように「大輔！」と叫んでいる。

そしていつものように大輔が奈々実の側へ向かう。

「大輔……今日でお別れだね。でも、大輔といた時間、本当楽しかった。ありがとね……」

奈々実はそう言うと、突然、涙を流した。

「ごめん大輔……泣かないで笑顔でさよなら言おうって決めてたのに……涙がとまらない……」

大輔は、そんな奈々実を見て、思わず自分も泣きそうになる。というより元々泣きそうだったのだが、男は女の前で涙を見せちゃ駄目なんだという自分なりのポリシーのおかげで涙を抑えることが出来ていた。

そして、大輔はもう一度自分の心で決心した。奈々実にはつきりと自分の気持ちを伝えようと。

「奈々実！」

大輔は大きな声でそう言った。

「俺も楽しかった。きつと奈々実ならどこへいっても大丈夫さ。頑張れよ。またいつか会おうな」

大輔は伝えることが出来なかった。最後の最後でプレッシャーに負けたのだ。

奈々実は「うん！　頑張る！　絶対会おうね約束だよ！」と言
い、去っていった。

大輔は奈々実が去った後、家族になだめられた。だが、それを無
視して大輔はどこかへ走り去った。

大輔は走った。奈々実との思い出を思い出しながら走った。気持
ちを奈々実に伝えられなかった自分の不甲斐なさを恨みながら走っ
た。次第に涙があふれてきた。涙を流しながら走った。近くにいた
人は不思議そうな顔をして大輔を見ていた。

どれくらい走っただろう。日も暮れてきている。大輔も冷静にな
り家へ向けてまた走った。

家へ帰る頃にはもう夜。家族はずっと家の外で大輔の帰りを待つ
ていた。

泣き崩れた大輔の顔をみて、家族はそつと大輔を抱き寄せた。

そこで目が覚めた。夢だというのに目覚めたら涙が溢れていた。

「大輔！　ご飯出来たわよ！」

大輔の奥さんらしき人が大輔を呼んでいる。

「ああ！ 今行くよ！」

大輔は、あんな夢を見たばかりなのでなのかは知らないが、いつもよりも大きな声で返事を返し、勢いよく階段を下りた。

（後書き）

初めて青春小説を書いてみました。ちょっとベタすぎたかもしれませんが（汗）

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4495d/>

懐かしき夏の思い出

2010年10月10日23時49分発行